

10 いつも気になるのは教え子や残留孤児たちのこと

語り手：岩崎 スミ / 聞き書き：資料収集調査員 湯山 英子

岩崎スミ（旧姓・畑）の略歴

大正 13(1924)年 12月	北海道夕張郡由仁町で生まれる
昭和 15(1940)年	家族が渡満(哈達河開拓団 <small>【用語集→漢蒙開拓団】</small>)の北海道農法指導員として)
昭和 16(1941)年	岩見沢女子職業学校を卒業後、1年遅れで家族の元へ
昭和 21(1946)年 6月	帰国
昭和 22(1947)年	結婚
昭和 55(1980)年	「日中友好手をつなく会」の初訪中国に参加
現在	由仁町に在住

はじめに

岩崎（旧姓・畑）スミ先生は、引揚者である。集団自決（麻山事件）によって家族、教え子のほとんどを亡くした。生き延びた者として心を痛み、日中国交回復【用語集→】を待って真っ先に中国を訪問した。以来、ずっと残留孤児への送金、手紙のやり取りを続けている。引揚後に農家へ嫁ぎ、農作業の合間に中国語を独学で勉強し、残留孤児へ手紙を送り続けてきた。教え子の鈴木（旧姓・高橋）幸子とは日本で再会し、今も親交を深めている。筆まめなスミの「幸ちゃん、」から始まる手紙は、幸子にとって今では心の支えとなっている。また、集団自決の生き残りとして「この体験を伝えていか

なければならない」と、自らの体験を『海外引揚者が語り継ぐ労苦』(平和祈念事業特別基金)のⅡとⅣに投稿している。

1. 渡満まで

畑家は、乳牛24頭、果樹園1町5反、そのほかに畑や水田13町歩を耕す豊かな農家だった。そこへ道庁の役人が「中国で北海道農法を広めてほしい」と仕事熱心な兄に頼んできた。父はまだ現役だったが、「兄だけ行かすわけにいかない」と、両親と兄夫婦と一緒に渡満することになった。スミにはもう1人兄がいるが、すでに満洲警護隊に入って満洲の主要都市を転々としていた。当時、スミは岩見沢女子職業学校に通っており、卒業まで寄宿舎に入って1年後の春、卒業と同時に渡満した。

2. 満洲での教員生活

訓導として小学校勤務

哈達河開拓団の北海道農法実験農場として、家族15戸が暮らしていた。とはいえ、それぞれの家は離れている。兄は農場のほかに馬、羊、乳牛などを飼い、その牛の買い付けに岩手県を何度か行き来している。実験農場にはバターを作る工場があり、そこへ搾った乳を納めていた。いい作物を作っても強制的に関東軍^{【用紙集→】}に出荷し、「そのバターを一つも食べた覚えがない」「作物が出ていくのを見ていただけだ」と言う。

住んだ家は、床にオンドル^{【用紙集→】}が敷かれているが、土間と2間だけの間取りだった。北海道の家に比べると「薪小屋より小さくて驚いた」と言う。この小さな家に兄夫婦、

両親とスミが暮らした。といっても最初はほかの家族との共同生活で、スミが行ったときにこの一軒の家が提供された。この家を建てたのは中国人の大工さんだった。

こんなもんですよ。驚いたでしょう。ここが玄関で、ここからごめんくださいって入ったら、ここが母親と父親のと（一緒の）私の部屋で、私はほとんどいませんけどね。兄と兄嫁の部屋が6畳、ここには戸棚があって、みんなで御飯食べて、ここにカマドがあって、ここで火を焚いてオンドル。ここで火を焚くと全部暖かくなるんですよ。煙りがここから出て。こんなちっちゃこい狭い家に。うちなんかは家族が少なけど、子どもが多い家はどんなふうに住活したかと思うよ。



岩崎さんスミさん家族が住んでいた家



畑スミさんが在満国民学校奉職時代 20 歳頃

スミは、渡満後すぐに満洲国民学校^{【用集→】}の訓導として開拓団の小学校に勤務し、月曜から土曜日までは小学校の寄宿舎に寝泊りしていた。ほとんどの児童が、寄宿舎生活をしており、スミも赴任早々、粗相の後始末をすることになる。

1年生から寄宿舎制度。学校の先生は、お母さんの仕事も、お姉さん、お兄さんの仕事も、先生の仕事もする。私はそこで鍛えられたの。小さい子だから寝小便をするでしょう。勤務最初の日から、大きな風呂場で校長先生が汗だくで洗濯しているの。布団に熱湯をかけて押し出しているの。それが次の朝から私の仕事になったの。

そのときの校長先生が大阪出身で早稲田大学^{わせた}を卒業した高田成章^{たかだなりあき}だった。スミとは3ヵ月間、一緒に仕事をしただけだったが、高田校長から教師として人間として多くのことを学んだ。戦後、日本で再会し、残留した教え子たちと深く関わっていくことになる。教え子たちの寄宿舎生活は、月曜日に家から集団で登校して5日間寝泊りし、土曜日にまた集団で家に帰るということを繰り返していた。児童と先生は、ほとんど寝食を共にするので、密接な間柄になっていた。家のある集落まで一緒に登下校するときもあれば、スミは1人で馬に乗って学校へ行ったこともあった。

片道3里だよ。寄宿舎へは月曜日に生徒と一緒に行ってさ。そのときにね。みなと同じ行動ができない日が何日もあるわけね。いろいろ学校の仕事があつてね。大雨が降ったの。私は学校へ遅れていくわけにいかないでしょう。馬で学校に行ったの。乗馬で何回も学校に行つたですよ。立派な馬を北海道から連れていっていたから。馬だけは村一番の馬。馬に乗って行ったら、職員室の戸がぱあっと開いてほかの先生が声を張り上げて、「ハタ先生、女のくせ

に馬に乗ってきた」って。さすが北海道の女性はなんとかだっと思って言ったの。女は馬に乗らないものと思っているんですよ。

馬に乗って学校へ行き、同僚の先生たちを驚かせたことを、今も鮮明に覚えている。また、乗馬姿のスミを見た中国人が「アイヤー」と手を振ってくれたそう。北海道では、馬がなくては生活できなかったのである。この馬を使って、畑家では満洲でも北海道と同じ農業をしようと試みていた。ジャガイモの種を北海道から送ってもらい、それを植えたり、トウモロコシ、アズキ、大豆、稲も作っていた。北海道の由仁の家から、農機具、馬、牛、綿羊までも運んだ。国家丸抱えで、北海道農法を普及させようという政策に乗ったことはスミ自身も認識している。また、実験農場の人が優遇されていたことは、白米の特配で感じていた。

白い御飯は国家がくれたの。私ら北海道の人間にだけ。北海道実験農場の家族にだけは、特配だったの。親方日の丸でね。生活に何の心配もないのは北海道の人だけだと皆に羨ましがられたの。北海道農法を成功させるために日本国家が応援したんでしょうか。

ニワトリは放し飼いでタマゴはどんどん産むし、アヒルはそこらじゅうにいっぱいいるし。だいたいキジがいっぱいいるの。ニワトリぐらい。それをドンと鉄砲で打ったら、毎日、毎日、キジ御飯。ノロっていう鹿のバンビちゃんみたいなのが、いっぱい飛んで歩いているの。それがまた美味しいの。食料には豊富だったね。キジはニワトリみたいにそこいらにいるんですよ。朝、兄さんが行って、どんと狙い撃ちするとか、罠をかけたことがないけど、穴の中になんか引っかけておいてキジが何かする餌を食べようとしたら捕まえられて、そのキジ

を連れて来て、それを置いて、そこまでしたらうちの母さんが小さく刻んで、その肉を美味しい味をつけて御飯と焚くの。それは美味しいの。新鮮だし、自然の野山を飛んでいるから肉質がいいの。そりゃあ美味しいですよ。キジが豊富で、毎日毎日食べ飽きなかったです。

白いご飯だけでなく、そのほかの食べ物にも不自由することはなかった。学校の寄宿舎の地下にある食料庫にはぎっしり食べ物があつた。校長先生の「食べ物だけはしっかり」という方針も大きかったが、白米、味噌、肉類など食料には恵まれていた。スミの就任当初は、児童の数も少なく、複式授業だったがのちに全校児童 200 人ほどに膨れ上がっていった。

教材は牡丹江へ

最初に受け持ったのは 2 年生 15 人で、複式ではなかった。その後は 1 年生ばかりだった。2 年生のときに鈴木（高橋）幸子を受け持ったと記憶している。学用品や本は、^{ぼたんこう}牡丹江まで出かけて買った。その牡丹江までの出張が、楽しみでもあった。

校長先生やほかの先生がいろいろ出張したら、生徒にも私にも必ず美味しいものを買ってきてくれたしね。家族と同じですよ。外地に行つて。学用品を買いに行くには 1 日かかるの。汽車で。行くだけでだよ。必ず牡丹江に一晩泊まって、次の日に帰ってくるんだよ。買ったものは汽車で送ります。小さいものはリックに背負つて帰ってきました。

学用品はね。私は女の生徒を教えるために、刺繍糸、刺繍針、裁縫道具とか、そういうものを主に買ったね。先生たちはノート、鉛筆、絵の具、紙。先生たちは本。校長先生が読書家

でね。職員も勉強しなければだめだって言ってね。職員のための図書を買ってくれるの。

高田校長が惜しげもなく買ってくれる本は、本好きの彼女にとって一番嬉しかったようだ。また、夏休みや冬休みになると牡丹江まで、警護隊に勤務する兄夫婦の家へ遊びに出かけることもあった。兄の家の隣に住む女性と一緒に映画を見に出かけるのが楽しみだった。当時の牡丹江は、「札幌より大きな町」だったと記憶している。牡丹江では、中国料理を食べたり、人力車に乗ったり、中国服やロシア服を着ておしゃれを楽しんだようである。

運動会

スミの勤める小学校では、中国人学校との交流があった。1週間に何時間かは、日本人教師が中国人の学校に行って日本語を教え、逆に中国人教師が来て中国語の発音を教えるなど、お互いの行き来はあった。また、運動会での交流もあった。新任のスミは、遊戯などを児童に教え、それを披露していた。遊戯を教えるのは初めてだったが生徒はすぐ覚えてくれた。

中国人の学校から日本人の学校にやって来るの。整列して、一張羅の服を着て、両手にバラの花かな、シャクヤク、ボタンの花をピンクや白の柔らかいちり紙を見つけて、大きな造花を作って、ピンクと白、みどり、やって来るんですよ。生徒全員が。広い野外の運動場で、イーアルサンスウ、ウーリヨウ、チイパー、アルアル、サンスウ、ウーリヨウ、チイパーとふしをつけながら歌い、踊るの。すばらしいなあと思って見たよ。日中友好、中国人と日本の学校の関係はとても良かったですよ。日本からも中国の学校へ招待されるの。運動会に。

私が教えた遊戯ね。何を教えたかな。何にも知らないのに、人間は何も出来なくても、やらなければならない立場に立たせられたらね。不思議と出来るもんなんだね。やったですよ。何でも寝る時間を惜しんで。教師用の本をしっかりと読んで。それを中国人の学校へ行ってご披露するの。帰りにいっぱいお土産もらって帰るの。ユーピンです。月餅ってかいて、中にハウセンカ、タマゴだの何かいっぱい入っているの。あれは銘菓ですね。

家では中国人家庭との行き来はあまりなかったが、兄が中国語を話せるので交流はあったようだ。敗戦間際になると、中国人から「早く日本に帰りなさい」と言われていた。また、開拓団の外からの侵入者については、脱走兵を匿った記憶がある。スミの母が日本人の若い脱走兵を押入れの布団の中や味噌小屋などに匿うのを何度か目撃している。

記憶力のいい幸ちゃん

鈴木幸子は、家が近かったので寄宿舎には入らず、自宅から通学していた。鈴木幸子とは、敗戦までの2～3年の付き合いだった。それは、ほかの子どもたちも同じである。幸子の印象は、「勉強熱心で記憶力がいい」「絵でも字でもほかの子よりかけ離れて優れていた」ことだった。

日曜日も学校に来たんだよ。ほっぺた真っ赤にして。雪の中をこいで。あらびっくりするでしょ。「あら、幸ちゃん今日は日曜日ですよ」「知ってますよ」なんて。「どうして日曜日も学校に来るの、この遠いところ歩いて」「私、勉強が好きなんだ」ってニッコニコなの。

クニちゃんって仲良しと一緒に来てましたね。よく私の家にも遊びに来てね。幸ちゃんが頭いいから。あの先生の家に行って何を食べたとか、どんなお話を聞いたとか。みんなあの子は覚えているの。私はなんも覚えていないのに。先生がああやった、こうやった、ああ言った、こう言った、今も全部覚えているのよ。そうでしたかと思ひ出すようなもの。あの子が頭いいもんだから、助かっているんですよ。あの子はね、自分の父親の名前から、兄弟の名前から終戦後3年経っても覚えていたの。それで親が助けに行ったの。ほかの子は何も覚えていないのに。ひとつも自分の名前さえ、親の名前も覚えていない。それだけ人には能力の差があるんだと。覚えていないから駄目な子だというわけではないんですけど。覚える力がある子と無い子がいるんですね。幸ちゃんは何でも覚えている。あの子に聞くとまあなんでも覚えていますよ。親が迎えに行かないでむこうに残っていたら、今ごろ黒龍江省の省長さんの奥様になっているかもしれないっていつも思うけど、本当に賢いの。でもね、なんぼ賢くても運というものがないと、助からないですね。苦勞ばかりしていますよ。今だって学校に行けなかったことを悔やんでね。字が書けないとか字が分からないとか悔しい思いをしていますよ。戦争のために自分の進みたい道に進学できなかった、それはとても不運なことです。

教え子のほとんどは集団自決で死亡した。奇跡的に助かった子ども7人は、近くの中国人が養父母となって引き取っていた。一番年長だったのが幸子だった。一緒に助かった馬場周子^{ばばしゅうこ}以外はほとんど日本語を忘れていたが、幸子は親の名前、一緒の集落に住む子どもらの名前を覚えていた。

3 . 逃避行、そして引き揚げ

自決当日は研修のため出張中

昭和 20 (1945) 年 8 月 6 日、^{とうあん}東安市の女学校に音楽の研修目的で行くことになった。東安省の女性教師が 4 泊 5 日の日程で研修をすることになっていた。8 月 9 日、ソ連が進攻して東安からハルピンに避難命令が出た。時を同じくして哈達河開拓団も避難が始まり、途中の^{まさん}麻山で集団自決が行われた。それを知らないスミは、牡丹江からハルピン、^{ほうてん しんよう}奉天 (瀋陽) まで危機を脱して南下した。途中で「哈達河にはもう日本人がない」と知らされ、どこか出会えるものと信じて逃避行を続けた。スミは、奉天の兄のもとへ着いてから、ソ連兵から身を守るために丸坊主になった。昭和 21 (1946) 年 6 月、両親、兄夫婦の消息を知らないまま日本に帰って来た。奉天までの様子は『海外引揚者が語り継ぐ労苦』に収められているのでここでは割愛する。

日本に引き揚げ^{引揚}後スミは、北海道の由仁町の親戚の家に身を寄せ、約 1 ヶ月間は疲労のため寝てばかりいたそうである。数年後、同じ町の農家に嫁いだ。戦後の混乱の中、誰もが必死で働いたようにスミも嫁ぎ先で朝早くから夜遅くまで農作業に追われていた。

仕事に追われながらも、「なぜ、あのような事件が起きたのか」はずっとスミが持ち続けていた疑問である。そんなとき、^{なかむらゆきこ}中村雪子が由仁のスミのもとに訪ねて来た。彼女は『麻山事件』(1983 年) の著者である。中村雪子が北海道の岩崎スミ宅を訪問したのは、昭和 50 (1975) 年 6 月 30 日で、それが初対面だった。中村の著書の中でも、スミが集団自決で生き残った開拓団員の男性宛の私信が掲載されている。その中に「麻山に今も生存しているであろうと思われる当時の生き残りの子達を本気で探さない何

故ですか」「私の母や兄達は満州の土になって本望でしょう。けれど哈達河の在満国民学校のかわいらしい純真な生徒のことは何年たっても昔のままの顔が次々と浮かび上がり、苦しい最期をさせてかわいそうだった」「学校の先生、もっと生徒を守ってほしかった」と書かれている。

お父さんもその家族も、家族を撃って自分も死んでいます。そういう場面に遭遇したときにね。みんな人間の顔が違うように、判断の決断の仕方も違って、生残った人と死んだ人がいて。全員が、男の人が生残ってソ連兵と戦うとかなんとか、うまいとこ、そのへんが分らないのですよ。そこにはいないし。心理状態は。でも、帰って来た男の人はね、その生きて帰って来たために、心の中で苦悩したことじゃないかと思うよ。死んだ方が良かったんじゃないかね。自分が人を殺して生きていたら、辛いんじゃないかね。自分の手でよその奥さんや友達の奥さんや子ども、自分の子も銃殺しているんだからね。だけど、生きて帰った人は、あそこで死んだひとよりも長い間、死ぬまでの苦しみをしただろうと、思われるのよ。それも可哀相ですよ。本当に、死に損ねだ。自分もすぐ行くからって言ったけど、自分で自分を殺すことができなくて、生残ってしまって、死ぬチャンスを失って、帰ってきてからもこの事件は、参議院かなんかにかげられたでしょう。証言させられたとき、私のいた学校の校長がこう証言しているんだよ。新聞で読んだけど、「あれは全員の願いによって、射殺したんだ」。それは、校長先生の勝手に思うことであって、死にたくないっていうのが本心だと思うよ。全員の願いというのは、今でも違おうと私は思う。

スミは、自身が病床の身でこう語った（2回目の聞き書きは、骨折療養中の病院）。自分がその場にいたら「止めていたのに」という思いと「どうしてなんだろうね（あ

あいうことが起きたのは)」の問いは、60年以上も経った今も持ち続けている。この『麻山事件』の本が出たことで、高田校長がスミの生存を知ることが出来、北海道まで訪ねてきた。

中村雪子さんが『麻山事件』って本を出したとき、それを先生がどこかで読んで、私や教え子の納富善蔵さんたちが北海道に生きていることが分って、高田校長と納富善蔵さんが手紙のやりとりをして、善蔵さんが私の家に来て、住所を教えてくれたので、私も早速手紙を出したの。私の家まで訪ねてくれたの。私の家に3～4日泊まったね。帰りしなにね、家の状況は分るでしょう。裁ち板の上で残留孤児たちに手紙を書いていたら、「おまえさんの机はそれか？」って言うから、机を買うお金はなかったから「そうですよ」って言ったら、帰りの途中、青函連絡船の中から30万円送ってくれたんです。「これは、あんたにあげるから」「好きなように使って」。でも、私は先生からお金をいただく理由はないですから、それは全部残留孤児に送ったですよ。高田校長のお金だから、ちゃんと何に使ったか高田校長にお手紙を書くように、住所を書いて送ったんですよ。それから先生から、私の通帳に全部で350万円送ってくださったんですよ。自分は帽子に穴が空いているのに。節約してくれたお金を送ってくれたの。残留孤児を自分も助けてあげたいからこれを使いなさいって。その後も100万円ずつ何回か残留孤児たちにとって送ってくれたの。

高田校長からもらったお金を生活に困窮している残留孤児を優先に送金し続けた。送料はスミがせめてもと負担した。残留孤児には、スミの名前で送金したため、「残留孤児は私が送金したと今でも思っている」と言う。高田校長は、表立って自分の名前を出すことを嫌がった。そのほかにも高田校長は自分のお金をスミの名で送金してい

たらしい。

その頃、スミにはすでに3人の成人した子どもがおり、幼稚園を頭に4人の孫もいた。孫の面倒、家事、畑仕事、道庁の嘱託で労働省の婦人少年協助員の仕事、そして中国から来た手紙の返事、中国語の勉強と一睡もせずに翌朝の仕事にかかったときもあった。それだけに高田校長への会計報告は、大きな負担となっていた。しかし、生活を切り詰めて1円でも多く送りたいという気持ちが、人間としての喜びになっていた。

4 . 残留孤児たちへ

どうして畑（岩崎）先生だけが？

話は前後するが、中村雪子著の『麻山事件』が世に出る3年前、NHK特集『再会～35年目の大陸行～』（1980年）で、スミが参加した中国残留孤児^{【用語集→】}を探す訪中調査^田団のことがテレビで放映された。この調査団は、中国残留孤児の肉親によって結成された「日中友好手をつなぐ会」が、国に先駆けて調査を行ったものである。同会^{やまもと じしやう}の山本慈昭住職ら32人の訪中団は12日間にわたって吉林^{きつりん}、長春^{ちやうしゆん}、ハルピン、瀋陽を回った。その中の1人がスミだった。

NHKの放送後、私が生きているってことが分って、みんなびっくりしてね。岩崎さんはどうやって帰って来たんだろうって。みんなが死んだのに、どうして岩崎さんだけが帰って来たんだろうって不思議がって。NHKに問い合わせの電話が鳴り止まなかったって、NHKの人が言っていましたよ。

このとき、青竜の村から教え子とその知り合いの残留孤児が滞在先のハルピンまで会いに来た。青竜の村は、鈴木幸子が拾われた中国人養父母が住んでいた集落である。幸子姉妹のほかに5人の孤児がいた。このうちの馬場周子にスミは訪中前から手紙を出していた。また、送金もしていたが、これは届いていない。住所を知っていたのは、鈴木幸子から聞いていたからである。幸子とは昭和35（1960）年ころに北海道で再会を果たしていた。



昭和35年、鈴木幸子さんが戦後初めて岩崎家を訪ねたとき

ハルピンから奥地に日本人は入れなかったの。奥地から残留孤児がハルピンまで出てきたの。ハルピンで会ったんですよ。木の下に新聞紙敷いて寝ているの。3日分の食料持って。そこに私が教えた以外の生徒がついてきていたの。黒川^{くろかわ}たけお、馬場周子、いけのつたこ、滝澤麗^{たきざわれい}子、渡辺満昭^{わたなべみつあき}、くればやしかずこ、坂井^{さかい}ようこ。くればやしかずこさんのお母さん、残留婦人の通訳としてついてきたんですよ。奥地から旅費を村の人からカンパしてもらって。村人がカンパしてくれたんだって。私がハルピンに送ったお金が届いていなかったんですよって。

そのお金はあとで戻ってきたんですけどね。

訪中団への参加は、スミのかねてからの希望だった。生活費を切り詰めて40万円近くの旅費を捻出した。そういう人がほとんどだった。「実情を見たり、聞いたりしたい。しないではいられなかった」と言う。

[注] 訪日調査^{【明瞭化】}対象孤児のうち、身体等に障害を有するため訪日調査に参加することが困難な者について、日本政府職員が訪中して当該孤児の身元や肉親に関する情報を聴取するもの。平成3・4年度において各2回実施され、合計で18名中3名の身元が判明している。



平成5年訪中のとき方正にある墓を訪ねた



平成5年麻山の自決現場(右から岩崎、松田、鈴木)

多くの再会と別れ

麻山の慰霊には7回、行っている。最近では、平成16(2004)年に札幌^{さっぽろ}の大学生や高校の先生たちとで訪問した。教え子の鈴木幸子も一緒だった。この時期、おりしも靖国^{やすくに}問題が影響して、慰霊の許可が下りなかった。このとき麻山の近くまで行くが現地訪問には至らなかった。

1980年をはじめに何度も足を運んできた中で、日中関係の微妙な動きが現地での対応に影響を与えていた。公安局【用難集→】から残留孤児に会っていけないと通達があり、スミはその警備をかわすように以前から孤児との接触を続けてきたのだった。

小泉こいずみ首相の靖国問題があって、中国人のやさしい心情を逆撫でして。あちらに残っている残留孤児はビクビクしていますよ。スズメが逃げるようにばあっと逃げるよ。普段、いじめられているからですよ。目撃してね。残留孤児と会ってはいけないって公安局は言うの。私たちはよそから来ているから「はい」って何でも言うことかかなければならない。中国の規則を守らなければならない。私たちに会いに来る。暗がりの中集まってくるんですよ。会って肉親を捜してほしいからね。その通信の方法は、2階、3階の窓から紐を長くたらしめて、私たち旅行をするときはたいがい綱を持って歩いているから、缶詰の缶や籠にお金や日本から持って来たものを入れて、通信事項を書いて、ツツツと暗いからわからないっしょ。見えなんでしょう。警察官が分からないように落としてあげるんですよ。皆はぱっと拾って読むんですよ。朝の寝ている時間からやってきて。あの人は知恵があるんですね。女の職員に頼んで、こういうわけでこういう先生が来ているから渡しておくれって頼んだものが、私のところに届くんですよ。それが1回、見つかったちゃってね。

係員に見つかり、叱られたことがあった。その係員から「あなたは、日本から来た日本人ですよ。こちらに残っている残留孤児は中国にいる日本人だからあなたたちと違うんだ。日本人でも、中国の日本人だ」と。そして、「勝手に手紙をやったりもらったり、話をしたり、お土産をやったり、そういうことをしてはいけない」と言われた。日中関係が、教科書問題でぎくしゃくしていたときである。それでもスミたちは、何

とか接触したいと、朝早くに町に出て行った。孤児たちは、家に帰らず木の下で寝て待っていた。「厚生省【用紙集-1】に渡してください」など、日本へのことづてを頼まれた。スミたちは見張られていることを知っていたので、市場でニンニクをカモフラージュ用に買い、手紙を服の下に隠して宿に戻った。しかし、それもどこかに見張りがあるらしく、宿に戻るとそれらの行為は全て知られていた。再び、「夕べあれだけさんざん残留孤児に会ってはいけないと言ったのに、どうして中国の規則を守らないんだ」と叱られた。食い下がっても、聞き入れてはもらえなかった。

違いは分かるけど、その子どもたちは必死の思いで奥地から出て来て、肉親を捜してほしいという一心で、何日分のお弁当、コウリヤンの握り飯ですよ。油で揚げたマントウを持って、木の下で寝ているんですよ。私たちを待って。私たちに祖国に帰りたいということを伝えに来ているのね。それを向こうの公安局は厳しく取り締まる。そして、夜になったら歓迎会があるんですよ。食べきれないほど美味しいもので歓迎されて、ブドウ酒を飲まされて。私はそんなところではないんですよ。気がきではないからね。宴会もたけなわで、みんな酔っ払っているときに、「私、ちょっとトイレに行ってきます」って席を立ったの。トイレに行くふりをしてぱっと外に出たらね、暗闇の中に中国残留孤児が待っているの。いつものことだから私はわかるの。いろいろ話をしたり、自分の用件を言うでしょう。そしたらライトでいきなり照らされたの、並んでいる顔が見つかったでしょう。警視の偉い人がやってきてね、そのときのおっかない顔をして、私たちが歓迎している顔とは180度、360度ひっくり返った恐ろしい顔で残留孤児を怒鳴ったんですよ。そしたら皆ね、稲穂にむらがっているスズメが皆逃げるでしょう。それと同じ調子でどこかに飛んだように、誰もいなくなって。たったひとりぼっち私の教えていた生徒がそこにちょこんと残ったの。クロカワタケオって子だけど

ね。残った子がさんざんに中国語で怒られてね。顔叩かれるじゃないかとかわいそうで、かわいそうでね。その残留孤児の行ないを見ていると、普段、どれほどこの公安局の人がいばって残留孤児にどういう態度をとっていたかが、その情景で了解できたの。日本人が来ても会ってはいけないとお達しが出ているんだね。

こうして手紙を受け取り、そして届けた。なかには、年齢が40以上も離れた男性に拾われ、妾のような扱いをうけ、その生活から抜け出したいが旅費がないので逃げ出せないという手紙を受け取ったこともあった。また、親類が承諾しないため、帰国できない残留孤児をたくさん見てきた。スミは身元引受人^{【用語集→】}として登録をしている。しかし、教え子の帰国のために由仁町に受け入れ準備をしたものの、「残留孤児を引き受ける経済力がないから」という断りの通知が来たことがあった。そのときは最終的に長野県の推進員が尽力して、帰国に至った。

しかし、帰国には至らず中国で亡くなった教え子も多い。馬場周子、川又礼子、佐々木良一。そして鈴木幸子の妹政子は北海道で亡くなった。せつかく生き延びたのに。そのほかにも手紙のやり取りをした孤児たちが、日本の地を踏まずして亡くなっている。そのなかで、一番身近な教え子が鈴木幸子である。お互い、同じ北海道に住みながら会うことは少ないが、常に電話や手紙で近況を知らせあっている。

「幸ちゃんが、政府の人々との歓迎会の夜、ピンクの服を着ていい声で歌った夜のことや、法子（孫）とも合唱してくれた“夢の蘇州^{そしゅう}の花散る・・・よ♪”かわいい姿、ゆきちゃんの思い出はたくさんあってなつかしい」（平成19年2月1日）。こう鈴木幸子宛の手紙に記してあった。



聞き書きを終えて

岩崎すみさんは、今年84歳になる。鈴木幸子さんの頁で書いたが、彼女は引揚者である。引揚げから、教え子だけでなく、ほかの残留孤児への手紙や送金を続けてきた。また、麻山事件の語り部であり、生き残った者として「伝えていかなければならない」を使命として感じている。それだけに岩崎すみさんの話は、スラスラと言葉が出てきて、何度も語ってきたのだろうという印象を強く受けた。しかし、話している途中で、記憶を探る作業をしている場面も多々あった。教え子の鈴木幸子さんの話になると、「幸（ゆき）ちゃんね」と切り出し、その「ゆきちゃん」という響きに、教え子だからという感情以上の彼女への慈しみを感じることもあった。「ゆきちゃん」の響きは、満洲でも同じだったのだろう。その響きに、満洲の風景が重なることが何度もあった。鈴木幸子さんと岩崎すみさんへの聞き書きは、交互に行った。お互い、目に見えない繋がりを常に感じながらのインタビューだった。

岩崎すみさんへのインタビューは2回（2006年10月21日、2007年2月3日）実施した。2回目は入院先の病院で行った。原稿確認は郵便でやり取りした（2007年12月7日）。集団自決への「なぜ、あのようなことが」の問いが長々と綴られていたが、できるだけ反映したつもりである。多分、前述した「何度も語ってきた」部分が、この集団自決への問いだったのであろう。そのほかに、教え子が中国で残留孤児のまま死亡し、その遺児が母の遺言である「日本の祖父母の墓に入れてほしい」という願いを叶えるために日本に来ようとしたが、親類が書類に判を押さなかったことから実現できないという憤りが綴られていた。

今も岩崎すみさんとは電話や手紙のやり取りを続けており、いつも平和への願い、中国人への感謝や尊敬の念などが綴られている。また、昨年は腸閉塞のため手術を行い、体調はけっして良好と

はいえないが、春になると畑が気になるらしく、農作業を続けているようである。最初のインタビューのとき、岩崎さんが作ったカボチャをいただいた。ほっこり甘くて、とても美味しかったのを覚えている。(2008年12月末)。(ゆやま えいこ)

基本データ

聞き取り日：平成19(2007)年2月3日

聞き取り場所：岩崎スミ宅

初稿執筆日：平成19(2007)年12月

<参考資料>

合田一道「証言 満州開拓団死の逃避行」富士書苑、1978年

中村雪子「麻山事件」草思社、1983年

蓑口一哲「開拓団の満州」新生出版、2005年

平和祈念事業特別基金編「海外引揚者が語り継ぐ労苦Ⅱ」1992年

平和祈念事業特別基金編「海外引揚者が語り継ぐ労苦Ⅳ」1994年